

家庭生活における権力と無力

Per Ivar Stjernelund

フェミニストらは男性が支配的で、女性が従属的であると主張している。これは、家庭における主婦のただ働き労働を男性が利用する機会が多いことを意味している。その様な社会規範は男性にどのような影響を及ぼしているのだろうか？この問題に答えるために、私はこのような社会規範が存在する主要な要因をあきらかにしようと思う。私は、これらの要因を発達心理学、生物学、文化の中に見いだした。次に、ここで問題にされている日常の世話の能力を男性が獲得することについて、社会規範がいかにそれを妨げているかをあきらかにしたいと思う。こういった能力の欠如は男性が他人との、特に子どもとの相互関係をコントロールする能力を獲得するのを妨げる。これは、多くの人にとって、特に母親との生活の分離を経験する男性にとっては致命的なことである。最後に、改善を促すであろういくつかの因子を提案しようと思う。

女らしさと男らしさ

男女間に存在する発達心理学上の基本的な差異は何か？Margaret Maler によって研究が開始され、Nancy Chodorow が主張したのは親密さは典型的な女性の特質の証明であるということである。女性は幼い少女の頃から彼女の母親との関わりのなかでこの親密性を発展させてきた。男性らしさとはより高度な自立の度合いで特徴づけられる。なぜなら男性は幼い少年の頃から彼の母親とは違うように成長するように育てられるからである。だから彼は母親とは距離を置かねばならないし、男性の役割モデルをみつけねばならない。Chodorow の理論では父親の役割は日常の世話の能力を持たないことが前提である。

Carol Gilligan は著書『もうひとつの声』の中で次のことを主張している。女性に特有な思考方法はほかの人々の世話をすることである。そのために女性は他の人々にたいして責任を負う。女性の行動は日常の世話のシステム全体についての徹底的な分析により規定される。男性特有の思考方法は、真っ先に何よりも、個人の権利と、幾分単純化した言い回しではあるが、他の人々にどのような影響を及ぼそうともかまわない無関心さに規定される。

生物学

妊娠するのは女性であり、出産するのも母乳を与えるのも彼女である。その授乳は「食べ物の源」であり、「心地よさ」であり、何より人間関係を築くための大切な手段である。父親は子どもと人間関係を築くのにこれとは別の手段を用いなければならない。

文化

新米の両親はこれまでとは全く違った環境に遭遇する。母親は責任を全うするように望まれ、そのため彼女は分担した役割を果たすのに必要な能力を与えられなければならない。彼女らはそのいっさいを育児サークルで得る。このグループはノルウェーでは保健所によって統括されている。

支配と従属

男女に子どもができ、母親と父親になるとき、その役割に伴う義務に対する責任が分担されなければならないというプロセスが出現する。このプロセスはだいたい自然に起こる。そしてこの経過は個人の発達の歴史、生物学的発達の過程、文化的視点、前もって決められた社会的期待などのもろもろのことによって影響を受ける。このプロセスは男性の支配と女性の従属という社会の規範に導かれる。

この社会規範の特徴は女性は他の家族成員の必要に応じて面倒を見ることに主に責任を持つことである。彼女はまた、家族のとりまとめにも責任を持つ。つまり彼女は家族の組織化と運営の両方について主導権を持たねばならない。その組織レベルとは、彼女が日常の世話に関連する問題を取り扱わなくてはならないということである。男性が彼女が提案した問題を取り上げないと決めるとき、彼女の無力さが明らかになる。

性別役割分業と伝統的コミュニケーション

従って、女性は責任のある親同士として、男性との関係を作る可能性を全く持たずに母が子どもに接するように男性との関係を作り始める。彼女は「彼が何をしなくてはならないか」を話す「口うるさいおばさん」になってしまう。男性の方はといえば、彼女のそれが始まるとまるで犠牲者のような気分になり、受け身であり続ける。彼の反応はほとんどが女性を理解し彼女と会話しようとするものではない。性別役割分業に基づいた伝統的コミュニケーションとは、お互いと会話することについてどちらも興味を持たない交差的なコミュニケーションである。だから、どちらもが変化するように導くことなしには、永遠にこのコミュニケーションのパターンは変わらない。

関係性

この社会規範は、女性が自分の責任を放棄するように決定する可能性を持たないことを意味している。このことは、このシステムで彼女が利益を受けることができないことを意味しているわけではない。第1の可能な利点はこの性別役割分業のパターンにおける女性の確立である。また2番目には、彼女らが権利を明確にすることである。これは何よりも真っ先に心理的な安定がある。3番目には女性が家族成員の世話をしているために、彼女は子どもとの関係では「主導権を握る」ことになる。多くの場合、この論点は離婚して父親と別れた子どもの保護のために用いられる。伝統的性別役割分業における父親の問題は何にも増して、彼自身と他の家族との関係が欠落していることである。このことは一緒に暮らしているときも、離婚した後も、人間関係の点で彼を女性より一層不利にさせる。

権利の明確化

公認された権利を持つことは、他人に対して責任を持つためにも、組織を形成するためにも重要不可欠である。伝統的な性別役割分業のパターンとコミュニケーションは、男性がこの能力を得る機会を失わせた。私はこれらのパターンの存在について、女性に罪があると言っているのではない。ただ単に、彼女らがこれらを維持するのに協力した、と言っているだけだ。男性もまた、学ぶチャンスを阻害するこのパターンの維持に協力している。この能力の欠落は男性の権力のある領域から引き離した。そこでは女性が公認された権利を持ち、他の人と「自分」の関係を築いている。

これらの規範の説明は、明白である。このように存在するパターンに対する責任を負わねばならないのが誰なのかを自覚したとき、その問題は顕在化する。そして、その誰かは、誰であろうと、それを変えることができるのだ。

責任はどちらに？

先に、私はこのパターンがこのような形で存在することの主な要因について明らかにした。子供の世話の煩わしさから解放されることがどんなに彼らにとってステキかということを、男性がコメントするのを私はしばしば聞くのではあるが、男性がこのパターンを望んでいるとは、私には結論しにくいのである。性別役割分業形成のプロセスは、ほとんどの部分において、どちらのパートナーからの強い要求もなしに起こった。このことはこのパターンについて、男性と女性のどちらにもこのパターン形成の責任が無いことを意味している。

転換

このパターンの変更が実現可能になったとき、私は対照的な結論に達した。それは男女両性がこのパターンを変えることに責任を負うべきであるということだ。女性は、彼女が決めたように男性が行動してくれることを要求する代わりに男性の果たしてきた役割に挑戦することによって責任を果たすべきである。この挑戦は男性が父親としての責任感を発達させるのを支援するだろう。女性はまた、性別役割分業を見直して権利を主張するなら夫婦間の対話を始めなくてはならない。さらにその際自分の意志を明らかにせねばならない。男性は世話役割を担うことを学ばねばならない。そしてそれに付加して生じる諸問題を処理する機会を与えられるべきである。

このように、女性は独り言を言う代わりに夫婦間で会話することを促している。男性の方もその挑戦を真剣に受けとめるべきであろう。男性自身が変わりたいと願うことは重要不可欠である。彼は他の男性と一緒にこの問題を取り上げることにより、性別役割分業のパターンを打開し、世話役割を習得するための能力を得ることができる。彼もまた、責任を果たしうるということを自分の周囲に示すことは、大変な挑戦である。最後に、必ずしも女性と同じことができるということが責任をとる男というわけではないということを指摘したい。従来 of 男性とは違う責任感のある男とは、誰かが何かをすることを決定するときに、ともに会話をするに責任を果たす男性のことである。

(森政淳子)